山梨新報「直言」原稿

二〇一〇年三月二六日（最終回）

# 油、その最後の一滴

山梨県立大学長　伊藤　洋

史上最大規模の音楽と言えば、その舞台装置と演奏時間からして、断然ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」だろう。序夜に続く3夜の4日間をかけて延べ15時間余の舞台というだけでも凄いが、作曲家が26年の歳月を制作に費やしたと聞けば、その情念としても尋常でないと想像がつく。

物語は、ラインの乙女達に守られて閑に河底に眠り続けてきた伝説の「ラインの黄金」を、ニーベルング族の強欲男アルベルヒが盗み出すところから始まる。その「黄金」から鋳造された「指環」は単に金銭的な価値だけでなく、これを所有する者には世界を支配する力も与えられるという。欲望と野心をたぎらせた男達、その中にはなんと神ウォーターンまでが、「指環」の争奪戦に参加するのだった。

しかし、これを手にした途端に彼らは争い、傷つき、最後には「神々の黄昏」の下で全員が死んでいく。指環はもとのラインの処女たちの手に戻り、再び河底で深い眠りにつくのである。

この歌劇は、途中第二次世界大戦後の数年間を除いて、1876年以来バイロイト音楽祭で毎年上演され続けてきた。そのようなこの物語が常にその「時代」を暗示してきたからである。ニーベルングの指環」を「石油」に置き換えてみれば、その類似に驚嘆せざるを得ない。

石油は、ラインの河底ではなく、アメリカ・ペンシルベニアの荒れたトウモロコシ畑の片隅で発見された。これを独占したアメリカは、よちよち歩きのひよこ国家から押しも押されもしない国家へと急成長したのだから、石油は間違いなく「ラインの黄金」に相当であった。

そのアメリカの蒸気船によって太平の眠りを覚まされた我が日本も、石油利権の争奪戦に参加する。だが、1941年8月1日、アメリカによる石油全面禁輸措置に遭遇し、ABCDラインと呼ばれる名の経済封鎖を受ける

や、これを突破すべく無謀な戦争に突入した。この時代の合言葉が「油一滴は、血の一滴」だったのは、筆者の記憶にはっきりとまだ生々しく残っている。

1960年頃をピークにしてアメリカの石油は枯渇し始めた。まさにゲモニー国家の血液が不足し始めたのである。そこで目を付けたのが中東の砂漠地域だった。中東戦争」という名に中東の砂漠の油争奪の砂嵐が巻き起こったのは、そのの砂底に石油というが発見されてから「黄金」である。

こう見てくれば、石油王でもあったブッシュ家二代の大統領が起こしたイラク戦争の本質は「石油利権」をめぐる「ニ石分奪」の争いであるベルンの指環」だったのだ。

そのもの国とのこかるだろう。我がの意識もが小泉純一郎氏が「参戦」したか否かは別にして、「指環」争奪の戦いに引き込まれたのだ。

ずり込まれたのだ。そして事実は明白だ。今後、石油指環」を巡る争いは、新興エネルギー国家中国が過去に類例のない巨大な多人数国家が参入し、国際社会を深刻化させてきたことで必ずや深刻な資源枯渇を増すだろう。

過日、発想の豊かさで知られる養老猛先生と話していたら、先生は「石油の最後の『一滴』が出てきた。この『一滴』は、血の一滴」だったのは、筆者の記憶にはっきりとまだ生々しく残っている。

これが未来を語るテーマです」と仰っていた。「血の最後の一滴が体から出てしまったら、人間は死にますね？」と畳みかけたら、「石油起源でない血液で生きられる人だけが生きる。僕は大丈夫だよ、森や昆虫とだけ付き合ってきたから、石油無しでも生きられる」と先生は胸を張った。

いま、この国と地域を取り巻く状況は実に深刻だ。石油の深刻さは、淵源のは石油枯渇と価格のそ結果と油田の原油高騰のためにはを上回る利益を得るコストを削減する人件費を、工場はしたがって行くに低賃金、労働者に外国に出て海外に切り離す。

県を強いる一刻も早く産業政策を根本から改めるべきだ。

後のいけない。石油終わるのだ。

一滴が石油のなくなる日。

本稿をもって本欄は閉じることになった。

筆者は7年4月1日から、早稲田大学の拙稿をお読み頂いた皆様方に感謝を申し上げる。

7年3月末の執筆陣の顔ぶれは、Y・Kさんに読者の皆様方に寄せる。

0年4月1日の8人目の下Kさんに心からお礼を申し上げる。

拙稿を過ぎ、読み頂いた多くの方々に感謝を申し上げる。

満つ涙を拭って筆を擱く。